

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語指導者養成】

受託団体名 特定非営利活動法人
中学・高校生の日本語支援を考える会

1 事業の趣旨・目的

教員経験者は学習支援者として即戦力があり、特に年少者の支援については学校現場を内側から知っているのが現実的な学校連携をとりやすい。しかし、地域でボランティア活動することの視点やノウハウ、第二言語習得理論についての知識は不十分であるので、この養成講座でそれらについて学び、修了後は、地域の人的リソースとして活躍してもらおう。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
平成 22 年 5月 28 日	かながわ県 民センター	西川朋美 宮崎幸江 坂内泰子 山縣紀子 樋口万喜子	・講座日程とシラバス ・受講生募集から開講ま でのスケジュール ・補助者について	講座日程とシラバスの 内容検討・受講生の募 集方法、受講条件の確 認、開講までの予定・ス タッフの役割分担
平成 23 年 1月 6 日	かながわ県 民センター	西川朋美 坂内泰子 山縣紀子 樋口万喜子	・実習『冬の補習教室』 実習の振り返り ・最終回のまとめについ て	実習の内容と進め方に ついて・受講生の感想 から最終回のまとめをど うするか
平成 23 年 1月 11 日	かながわ県 民センター	西川朋美 宮崎幸江 坂内泰子 山縣紀子 樋口万喜子	講座の振り返り 講座報告書 アンケートから今後のフ ォロー	講座全体を振り返って の反省と成果の確認・ア ンケートから研修後の 人材活用について話し 合う

【写真】



3 養成講座の内容について

(1) 養成講座名 「退職教員を対象とした外国につながる子どもの学習支援者養成講座」

(2) 養成講座の目標

日本の学校制度を熟知し、通常の教科指導に長けた退職教員を対象に、外国につながる子どもの教科学習支援に必要な態度、知識、スキル等を新たに教え、地域で活動できる学習支援者を養成すること。

(3) 受講者の総数 日本人 22 人

(4) 開催時間数(回数) 31 時間 (10 回)

(5) 参加対象者の要件 退職教員(在勤年数や学校種を問わない)。または、1年以上の教員経験者(校種不問)

(6) 受講者の募集方法

(ア) 「かながわ多文化子ども支援ML」、(財団法人かながわ国際交流財団 多文化共生・協働推進課)、「kodomo-ml」(中国帰国者定着促進センター教務部)、「Yokohamakokusai」(横浜市外国人教育連絡協議会:横浜市立の小中学校の国際教室担当者が中心メンバー)などのメーリングリストで受講生募集。

(イ) 地域のセンターに受講生募集のチラシ(別紙参照)を配布。

(ウ) ホームページに募集記事を掲載。

(7) 研修会場

相鉄岩崎学園ビル

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-17

かながわ県民センター (11月23日、1月5・6日)

〒221-0835 神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2 電話 045-312-1121(代)

(8) 使用した教材・リソース

『にほんごだいすき』シリーズ1・2・3年 鈴木重幸・工藤真由美・小高愛 むぎ書房

『にほんごをまなぼう』1～3 文部省 ぎょうせい

『日本語学級』1～3 財団法人波多野ファミリースクール 大蔵守久 凡人社

『新しい算数 3下』東京書籍

『国語』光村図書 3年上

『JSL 中学高校生のための教科につなげる学習語彙・漢字ドリル』NPO 中学高校生の日本語支援を考える会編

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
11月2日 13:30～16:40	外国につながる子どもの現状と課題～多文化教育の視点から	横浜国立大学留学センター講師	16名

	外国語としての日本語の教え方～きちんと「聞ける、話せる、読める、書ける」ようになるために	樋口 万喜子	
11月9日 13:30～16:40	来日したばかりの子どもへの日本語の教え方～楽しく学ばせるコツと工夫	(財)波多野ファミリー スクール主管 大蔵 守久	14名
11月16日 13:30～16:40	子どもの居場所づくり～学習者と支援者がともに学ぶ地域の教室	多文化フリースクール横浜講師 関口 真理恵	13名
	地域で支える子どもの学習支援～ボランティアとしてできること	中学高校生の日本語支援を考える会 学習支援ボランティア 柳沢 緑	
11月23日 13:30～16:40	“外国につながりをもつ子どもだった”当事者の声を聴く。～今、新しい市民として望むこと	横浜市立横浜商業 高校国際学科 日本語講師 大澤 洋子 協力:当事者の若者	22名
11月30日 13:30～16:40	バイリンガルの子どものたちの言語習得	横浜国立大学 講師 西川 朋美	10名
12月7日 13:30～16:40	多文化社会のことばと教育～カナダ・オーストラリア・ドイツの場合	上智短期大学 准教授 宮崎 幸江	13名
	多文化共生時代の教育行政のあり方	法政大学キャリアデザイン学部 教授 山田 泉	
12月14日 13:30～16:40	学習者に合わせた日本語教材の使い方、作り方	横浜市教育委員会 日本語講師 頼田 敦子	12名
12月21日 13:30～16:40	日本語指導から教科学習への橋渡し～リライト教材	横浜市立横浜商業 高校国際学科 日本語講師 大澤 洋子	13人

	「書く」ことの学習支援を考える	中学高校生の日本語支援を考える会 会員 細野 尚子	
1月5・6日 10:00～14:00	日本語支援実習『冬の補習教室』	TIE トマトマの会 代表 山縣 紀子	16人
1月11日 13:30～16:40	子どもたちを育む地域の力	神奈川県立外語短期大学 教授 坂内 泰子	14人
	振り返り～多文化の子どもたちが伸び伸び育つ社会を作るために	多文化社会コーディネーター 樋口 万喜子	

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

- 単語期～定着期という4段階の分け方と、期間の目安のつけ方(1年間で定着期をもっていく)という指導目標野立て方の説明は、とてもわかりやすく説得力があった。直接、日本語指導に関わっていない教員などへ、指導指針の目安を説明するのも活用できると思った。
- 英語教育にかかわってきた者として、子ども対象の言語教育の共通点を改めて実感し、学ぶ点が多かった。先生の話はポイントが明確で大変分かりやすく、アイデアの素晴らしさに、驚きと感動の連続だった。
- 外国語としての日本語なので、意欲を持続して学習させるためには、たゆまぬ教材研究と工夫に加え、子どもの出身国の文化をふまえることも必要だと思った。
- 先生のアイデアの豊富さ、面白さ、工夫の丁寧さ、全てにおいて学ぶことが多かった。素晴らしいと思うと同時に、教師がセンスを磨くことの重要性を実感した。
- 今回の講座の内容は、子供への指導のみでなく、初めて日本語を習う成人の指導にも応用出来ると思った。早速、利用していきたい。
- 子どもを高校入試につなげていくことが、やはりボランティアとしての学習サポートでも大事になってくると思う。私たち指導者が、研修を積み重ねていくことの必要性を感じた。
- 具体的な運営や、指導方法についての話は大変興味深かった。子どもの立場にたって、寄り添っていくことの大切さが改めて分かった。
- 日本の子どもに教える順番とは異なって、早く教えるべきこと、後回しにしてもよいことがあることを聞いてよかった。

- 日本人にとっては当たり前の言葉が、教科の中で使うものになると専門用語になるということ、さらに、紛らわしい言い回しなど、子どもたちは想像を絶する困難に立ち向かっているのだと思った。
- 3人の経験談は心に迫るものがありました。親の苦勞する後ろ姿を目にしなが、自分もこの社会の中で頑張らなければと最大の努力をしていらしたと思います。この素晴らしい経験を是非後に続く外国籍の「悩める子どもたち」に伝えていて欲しいと思います。目標となる同国人や先輩の姿は心にストンと落ちて明日への励みとなり、生きる勇気につながると思います。これからも皆で頑張っていきたいと願います。
- 今日は本当に感謝します。若い外国から来た方々のひたむきさに感動しました。日本人の若い人にも大いに聞かせたい。また、遠くから今日参加された方の中に視野の広い方がいて勉強になった。日本社会が多文化共生社会にもっともって成長できるよう参加していきたいです。
- 第二言語習得に動機を高めることが必要であることを学んで、どこまで日本語で、教科学習について取り組んでいけるかについても、動機さえ高まっていけばスムーズに進んでいこうと思えました。
- ダブルリミテッドの問題は改めて考えさせられた。また、来日年数の短い子どもより、日本で生まれ日本で長く生活している子どものほうが進学率が低いということは、大きな問題だと思った。
- 良い教材でもそれだけで進めていくわけにはいかず、2年目からは学校の授業内容の予習などもしなければならぬので、それぞれの教材の利点をつかみ臨機応変に使いこなすことが大切だと思いました。
- 書く力は、話しことばが豊かになって、ようやく芽吹いてゆくことがわかりました。支援者は一つ一つ気長に支援していきたいものです。
- 学年相当の内容を理解させるために、言い換えればいいということ、今回はっきりと知り、生徒に合わせてわかりやすい言葉でヒントを与えれば、学習意欲もわいてくるのがわかりました。
- 特に、読解力をつけるという具体的な指導方法や、教材の見つけ方など、勉強になりました。また、「楽しく学ばせる」ということは重要であると改めて思いました。

② 実施主体からの研修内容結果評価

外国につながる子どもへの日本語指導について、大きな視点に立った概論や現状の認識から具体的な指導法や教材など、さまざまな視点から捉えることができたと思う。また実際に今日本で生活している「もと外国につながる子どもたち」に話を聞くことで、本当に求められる指導とは何かを知り、また今後への励みとすることもできたと思う。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

●横浜市とその近隣で日本語・教科支援を行っている外国人日本語指導者及び日本人指導者を対象として、外国につながる子どもたちを取り巻く言語環境、支援において必要な知識や取り組む姿勢、さらに実践で役に立つスキルや教材などのアイデアを理論面・実践面双方から得、子ども達の目線に立った支援ができる指導者を養成する。

●地域の外国人に日本語学習や生活の支援を行っている人材が、多文化共生を念頭に置いた今日的課題に対応すべく、多様な人的リソースをコーディネートする方法や、様々な組織・機関と連携協働する知識や技術を学んで、実践していける人材を養成する。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

「トマトマ」や「地球っ子教室」と連携し、夏休み(8月23日、24日)と冬休み(1月5日、6日)に中学生を対象として補習教室を行った。特に冬休みは、受験を控えた中学3年生を中心に数学、英語、国語を強化したり面接したりするのを補習内容とした。神奈川県過去の過去問題を解き、希望者には英語の教員も向かえ、入試のリスニング問題の実施と解説も行った。

② 研修後の人材活用

研修を終えたあと、夏休み・冬休みの補習教室や、定期的な学習教室にボランティアとして参加を募り、活動してもらっている。

(12) 今後の課題

「生活者としての外国人」のための日本語指導が今回のテーマであったが、年少者の日本語教育は日本語の上達と学力向上を二大目標とする。彼らは生活するだけではなく、将来、多文化共生社会の貴重な人材となるのである。そのためには、当事者たちが短期間にリテラシーを持った市民に成長するための、専門的な知識や技術を持ち、教育全般を見通すことができる支援者を養成することが課題である。

また、日本語初期指導の教材、小学生向けの教材は多いものの、中高生が教科学習に連動できる教材はほとんどない。そうした教材作成も課題であろう。

さらに、地域での子どもたちの居場所作りも重要な課題である。知性、心身共に豊かに育ち、自立意識のある市民になるような学びの場としての居場所作りである。ここではボランティアが子どもを見守って、子どもの相談に乗ったり、アドバイスしたりすることも大事なはたらきとなる。地域のボランティアは、時として学校の先生と連携をとりながら、子どものためにより良い環境を整えていく力量も必要となるので、そういった研修

も続けられるような土台作りも課題となる。